オナニーするだけのバイトと聞いていたはずなのに、気づいたら人型自慰行為補助機械のお姉さんの奴隷になっていました。

「準備はいいですか」
ズボンを脱いだところで、天井から声が降り注ぐ。カゴに今しがた脱ぎ捨てたズボンとシャツを入れ、一つ深呼吸をする。リノリウムの床を裸足で踏みしめるぺたぺたという音に続き、今度はザザッというノイズ。そして再び、神経質そうな女性の声が聞こえてくる。
「……聞いていますか」
「あ、はい。大丈夫です。服も脱いで、準備はできています」
「そう。分かりました。では……」
「あの、最後に質問、いいですか」
「どうぞ」
目の前にはのっぺりとした、白い板のような扉。これが開けば、いよいよ実験開始だ。
実入りの良いバイトとして、同じ職場の怪しげな女性研究員から薦められた「肉体労働」。一日参加するだけで三十万円が即金で手に入るとのこと。明らかに怪しいが、懐が寂しい身としてはその金額の誘惑に抗えなかった。目的地と実験の日時だけが通告された書類と、

提供した覚えのない自分の顔写真が付いたＩＤ、そして誓約書だけが突然送付され、あれよあれよと言う間に俺はここに立っていた。

　実験に参加するための唯一の条件は「心身ともに健康」であること。書類の中で「人型自慰行為補助機械の動作テスト」とだけ書かれた実験には、それ以外に関する仔細な情報は何もなかった。まあとりあえず、俺はただオナニーをすればいい。……そうは思っていたが、一つだけどうしても気になる点が。

「どうしてこのバイト、こんなに……、その、お金が入るんですか」

「それなりにキツい内容だからです。質問は以上ですか」

「……誓約書にちゃんと目を通したんですけど、死なない程度のキツさですよね」

「大人しくしていれば大丈夫だと思いますよ。……よろしいですか」

　早くしろと言わんばかりの投げやりな確認に、俺はしぶしぶ首肯して再び扉の方を見る。大人しくしていれば大丈夫。暴れると何か不都合なことでもあるのだろうか。

　深く息を吸い込み、気合いを入れるように手を強く握る。大丈夫だ。一日のオナニー回数は最高七回。そうでなくても毎日自慰行為をするくらい、持て余した性欲の強さならそこそこ自信がある。

「実験中は、原則的に周りの指示に従ってください。体調に関しては事前に血管内に注入し

ていただいたマイクロマシンで監視しておりますので、それに応じてこちらから実験を中止することがありますが、あなたの意思による実験の中止は認められません。では、実験を開始します」

◆

扉の外と中では、異様なまでにその雰囲気が異なっていた。外を病院と例えるならば、今いるこの部屋は幼稚園、もしくは保育園の教室と形容するのが良いだろうか。背の低いテーブルは部屋の隅に退けられていて、足元には子供用の小さな敷布団が八枚。

その布団の中央に一人の女性が座っていた。年齢は二十代後半といったところか。保育士のような服装をしていれば、まだそれほど違和感はなかっただろう。紫に近い桃色と黒の淫靡な下着だけを身につけたその女性は、俺を見て柔らかく微笑んだ。お互いに下着姿という明らかに異常な状況において、彼女は全く動じていない。

なるほど、そうか。つまり――

「あら、こんにちは」

鈴を転がすような声が耳に飛び込んでくる。その瞬間にふと、幼い頃の記憶が喚起され

て何だか懐かしい気持ちになる。とりあえず「こんにちは」と返すが、俺の足は動かない。下着姿の彼女を見ていると、どうにもいかがわしい店に来たような気分になって緊張してしまうのだ。

「ね、先生のそばに来て。一緒にねんね、しましょうか」

自称「先生」は母性的な眼差しで見つめ、両腕をこちらに差し出してくる。セミロングの黒髪がはらりと揺れ、女性的なフェロモンが漂ってくる気すらする。

「あの。……もしかして、これが『人型自慰行為補助機械』ですか」

先ほどのいけ好かない女性研究員が呼びかけに答えてくれるものだと思っていたが、上に向かって尋ねてみても、反応は何も返ってこなかった。周りの指示に従えと言われたのを思い出す。しょうがない、先生の言う通り「お昼寝」をしてやろうじゃないか。

再び彼女を見やる。相変わらず彼女は俺の前で目を細め、二本の腕に抱かれるように誘ってくる。遠目から見ていたら本当に人間と見紛う出来だ。技術の進歩は凄いなぁと呑気に感心しながら、彼女を眺めつつゆっくりと足を前に進める。

柔らかな布団の感触が足に伝わる。幼稚園のお昼寝の時間を思い出す。ちょうどこんな風に、みんなで布団を並べて昼寝したものだ。俺は彼女の前に座ろうと腰を下ろした。むちむちの太もも。その奥に形成された三角地帯には、ふっくらとした恥丘が――

「ぎゅーって、してあげるね。はい、ぎゅー……♡」

女性の股間に気を取られて完全に油断していた俺は、膝立ちになって腕を伸ばしてきた彼女の胸に簡単に抱き寄せられてしまう。こちらは上半身裸、そして彼女はブラジャーだけ。当然肌と肌とが直に触れ合い、本物の人間の肌のような手触りにハッとさせられる。見た目は比較的痩せ型のはずなのに、彼女の体はどこを触ってもふわふわと柔らかい。

抱き寄せられたまま上を見上げる。女性的で豊かな丸みを帯びた乳房の丘。鎖骨、首筋と上り、彼女の美貌がこちらを見つめてくる。ミルクのような甘い香り。よく見ると、彼女の顔はどことなく不自然だ。寸分違わず左右対称で、目の中はどこか虚ろで……。

そしてその瞳の奥で、カメラのレンズが絞られる。その僅かな機械音に俺が気づくのと同時に、彼女が妖しい微笑みを浮かべてこちらに顔を近づけた。あらかじめプログラムされた、人間にとって心地のよい表情ではない。まるで値踏みするようなその表情は、彼女が自らの意思で「作った」顔だと確信した。

「……そうですよ。私が『人型自慰行為補助機械』です。ふふっ♡」

「ひっ……！」

耳元での囁き声には吐息が混じっており、背筋がぞくぞくと震える。近くで見れば違和感こそあれど、ここまでリアルなアンドロイドを見たのは初めてだ。その違和感も、人間

に比べて美しすぎることに起因したものだ。たとえ彼女と初対面であっても、異性愛者の男であれば間違いなく性的欲求を喚起させられてしまう。息遣い、表情の僅かな変化、温もり、柔らかさ、どれも全て人間と遜色ない。

「こーらっ♡ 暴れちゃだめでしょ？ 先生、おこっちゃいますよ？」

二の腕にふわふわとした肉が付いていて柔らかそうだと思った腕は、その細さに見合わない力で俺の体を締め上げ、僅かな身じろぎすら許さない。逃れようとするたびに、彼女の太ももに俺の股間が擦り付けられて力が入らなくなってしまう。実験前に飲まされた精力剤のせいなのか、いつもよりも皮膚の感覚が鋭敏になっている気がする。力の加減がおかしいし、もしかしてこのロボット、壊れているんじゃないのか？

「くっ、離してくれっ、むぐぐっ！」

「まったく……、失礼な話ですよね。こんな情けなくて弱い人間のオスに『オナニー用の機械』呼ばわりされちゃうなんて」

「オナニー用の機械」と吐き捨てた彼女の声音は、明らかに冷たい怒気を孕んでいた。怒らせてしまったか？ いや、まさか。機械に感情なんて無いんだから、そんなこと考えるだけ無駄だ。

「私、研究員の皆さんからは開発コードネームの『ストレリチア』って呼ばれてるんです。

でも人間さんには覚えにくいでしょうから、『先生』って呼んでくれてもいいですよ」

それを無視してどれだけ腕を叩こうが、胸の中で喚こうが関係ない。体をよじらせて逃げようとすると、さらにその縛めが強くなる。骨が軋んでいるのが感じられ、その度に全身に痛みが駆け巡る。

「んふふ……。私ね、殴られても蹴られても、そんなに痛くないんですよ？　人間の力では拘束からは逃れられないから、諦めて私の指示に従ってくださいね。従わないと……、ふふっ、なにしちゃおっかなぁ」

まるで内緒話をするように、俺の耳元で喋り続ける。脇を、そして背中を彼女の指先の繊細なタッチで刺激されると、途端に力が入らなくなってしまう。

「や、やめて……。助けて……」

部屋に設置されたカメラを探すが見つからない。天井から応答が返ってこなくて心配になる。俺を監視しているはずだから、この異常な状態に気づいていないわけがないのに。

「どうしたの？」

急に拘束が解かれ、正面から優しくぎゅっと抱きしめられる。俺の反応に合わせて、今度は猫撫で声で囁いてくる。女の形をした機械が、まるで意思を持って俺を弄んでいるかのようだ。今度は何をされるかわからなくて、俺は心の底から恐ろしさを感じる。

「やだ？　怖い？　そっか……。んふふ♡　でもね、私が君にどんなことしても、君がどれだけ泣き叫んでも、この実験は最後まで完遂するまで終わらないの。君が助けてって言っても、誰も助けてくれないよ？　最初からみーんな、君のことなんてどうでもいいと思ってるよ。ただの実験動物。モルモット。分かるかな？」

時折耳たぶにキスを加えながら、そんなことを囁いてくる。報酬金三十万円。それに釣られた俺がバカだった。脳が女性に抱かれていると錯覚し、安心感すら覚えてしまう。もうダメだ。俺はこいつに対抗できない。

「ああんっ、ふふっ。ね？　そんな顔しないで？　先生、困っちゃうな」

息が上がった俺の顔を捉え、三度収縮を繰り返すレンズ。俺を愛おしげに見つめているようで、その瞳には光が宿っていない。ただの対象物として捨象し、その頭に備わった人工知能ではおそらく、男性という共通項を持つ存在に対する性的奉仕のプログラムが呼び出し待ちになっているのだ。

「大丈夫だよ。おとなしく私の言うことに従っていれば、君を天国に連れていってあげる♡　普通の人なら余裕で耐えられるくらい、手加減してあげるから。ね？　ほら、言ってみて？　『先生、よろしくお願いします』って」

「っ、先生、よろしくお願い、します……」

「うんうん、よろしい。ちゃんと状況が認識できたみたいだね」
「じょう、きょう？」
「ここでは私が先生で、君はまだ物心もついていない子供なの。私の方が偉くて、君に指導する立場にあるの。いくら頭の悪い人間さんでも、このくらいはわかるよね？」
ああなるほど。おそらくそういうロールプレイなのだろう。しかし意思を持って動いているように見える彼女は、ただ自らに与えられた役を演じるだけに収まらない。俺を徹底的に見下し、先生という役割に基づいて俺に教育的指導を行うのだろう。
女性の細長い指先のようなマニピュレータで俺の男性器を機械的に刺激し、無限に生成される罵倒を女性の声を自然に再現した合成音声で俺の耳元に囁き続け、体内で温めた空気を圧搾して口腔ユニットから俺に吹き付ける。
そうやって性感を高められた俺は、きっとこの女の紛い物の前で無様に精を吐き出してしまうのだ。しかも罵倒オプション付きの。全く、本当に素晴らしいオナニー用の道具だ。
「だから、私の言うこと全部に従うこと。従わなかったり勝手なことしたりしたら、罰として一回、追加で射精ね。いい？」
その問いかけには「いいえ」という答えが許されていない。俺は迷いなく頷いた。
「じゃあ、……あらためて。ねんねしよっか。……んふふ、キミも男の子だもんね」

まるでその場所を既に把握していたかのように、するすると伸びた手が俺の太ももを辿り、そして股間をまさぐる。彼女はこちらと目を合わせながら、布越しに半勃ちのペニスを指でさわさわとフェザータッチする。突然の快感に喘ぎを漏らしてしまうが、これが監視されていることを思い出して、恥ずかしさに思わず口を覆った。

「ふふっ。『あんあんっ♡』ってきもちいい声、先生にいっぱい聞かせてね。じゃあ、先生の方にお腹見せてください。ごろーんって、できる？」

「う、うん……」

「よし、じゃあごろんしよっか。はい、ごろーんっ。……ふふ、よくできました♡」

彼女の胸に抱かれたまま、体勢を変えられて仰向けの状態になる。股に挟まれる形で、耳の横で囁かれながら手淫にもならない手遊びが続く。背中からはまるで人肌のように熱が伝わり、柔らかな彼女の胸がふにゅりと当たって、ブラの内側で形をひしゃげるのが感じ取れる。

「すりすり、好き？」彼女は俺の下着の上から、ほっそりした女性の指で竿を撫で付けたり、手の甲を甘く擦り付けたりする。そんなことをされたら、俺は首を縦に振るしかなくなってしまう。そうだ、これはオナニーなんだ。この機械が施す刺激に、ただこの身を委ねていればいいんだ。

「……はい」
「そっか。……うん。正直に言えてえらいね。ふふっ。触りますよ……」
パンツを下ろし、露わになった俺のペニスに、直に女性の手が触れる。既に彼女の柔肌の感触を知っていたから、その手に温もりが宿っているのは驚かなかった。しかし何よりも気持ちがいい。流石は人型自慰行為補助機械といったところだろうか。ただ手で扱き上げるだけでも、自分でするよりも何倍も快感を感じられる。
「ふぅーっ、ふぅー……♡。あらあら、もう大きくしちゃって……。おちんちん、ぎゅーっ♡　ぎゅーっ……♡」
一定のリズムで、まるで乳搾りでもするかのように竿をやんわりと握る。柔らかな人工皮膚の内側が金属でできているとは思えないほど自然な手触りで、何度も何度も。
「ふふっ、お耳、敏感さんなんだ。こうするとね、もっと気持ちいいよ……、んぁむっ♡お耳をぺろぺろしてあげると、男の子はみーんな、とろとろになっちゃうんだよ……♡」
突然耳に襲いかかる刺激。熱を持った風が吹いたと思えば、耳介が生温かく滑りのある空間に包まれる。
「どうかな？　ぷるぷるの唇ではむはむってされるの、気持ちいい？　……うん、そうだよね♡ 続けるよ……、ちゅっ。あむっ、ちゅっ、ちゅっ。れろれろ……。はむっ、はむは

むっ♡ ちゅーっ、ぺろ、ぺろっ」

淫らな水音で右耳がいっぱいになる。耳の段差を舌先でくりくり、耳たぶを歯ではぐはぐ。時折首筋にもキスをしながら、右半身を熱っぽく攻め立てる。当然、ペニスにかかる刺激は継続して行われる。「機械のような」という比喩がぴったりなその手技は、耳舐めをしながらも先ほどと全く変わらない正確無比な刺激を肉棒に加え続ける。

「ちーこ、ちこ。ちーこ、ちこ。ふふふっ♡ お耳ぺろぺろされながら、おちんちんちこちこされるの気持ちいいね……♡ おちんちんおっきできてえらいぞ♡ ごほうびに先生の柔らかいベロで、お耳おまんこ、ごしごしってしてあげる♡ 先端をぐぷぷって、入れて……♡」

ぞりぞりと擦り上げるような音が耳の奥で響く。ぐっぽ、ぐっぽと繰り返し耳に舌を突っ込み、外耳道を人工の触手で犯し尽くす。あぁ、うぅと間抜けな喘ぎ声が口の端から漏れているのに自分でも気が付いているが、あまりの快感にそれすら抑えることができない。

にゅぽにゅぽと連続で舌が耳穴に突っ込まれ、今度はベロ全体が耳にぴったりと押し付けられる。ぱっと離されて耳がひんやりとしたところで、再び妖艶な熱い吐息と舌が襲いかかる。快楽の波が次々に押し寄せ、背筋が、手足がぴんと張り詰める。

「んぁむっ、ちゅっ♡ ふふっ、じゃあこのまま、カメさんにぎにぎ体操、やろっか♡」

すっかり硬くなった肉竿の先端を手のひらで覆い隠して、少しずつ揺らしながらきゅむきゅむとじれったい刺激を加える。機械的に一定のリズムで先端を包み、暖かくなったらぱっと離す。自分で扱いて射精に至りたい欲求が湧き上がるが、たとえどれだけ身を捩らせても、彼女の太ももの甘い拘束からは決して逃れられない。

「にぎ、にぎ。にぎ、にぎ。ふぅーっ……、んふふっ、気持ちいい？　もっと？」

「う、あ……、もっと、してっ……！」

気持ちがいいが、あまりにももどかしすぎて射精に至れない。お腹の下でじんわりと快楽が熟成されるだけで、精液が輸精管を駆け上ることは絶対に許してくれない。彼女の手のひらから湧き出たローションのような液体が、ぬちゅぬちゅ、くちゅくちゅと卑猥な音を立てるが、その音に反して与えられる刺激は猛烈に弱い。

「にゅーっ。ぱっ。ぎゅっ。ぱぁっ。ふふっ……♡　だーめ♡　君のお子さまおちんちんは、ごしごしって早くしごいたら、すぐに出しちゃうよわよわおちんちんだから、これ以上はしてあげません♡」

「くる、しい……、出させて……」

「だめですよ♡　白くて濃いミルク、金玉の中でもっとぐちゅぐちゅドロドロにして、たっぷりとろとろぉって出すんですよ？　ほら、にぎ、にぎ。きゅっ、きゅっ。ふふっ、ふぅー……

♡」

身悶えするような快感に彼女から距離を置きたい気持ちすら湧き上がる。行き場のない快感が身体中を駆け巡り、その場でじっとしていられない。体が震え、勝手に脚が跳ね上がる。それを後ろで眺める彼女は、きっと俺を見下した目で見ているのだろう。

しかしそんなことはもう関係なくなるほど、俺は彼女の淫技に心を溶かし尽くされてしまっていた。快楽に声を上げるのを恥ずかしがっていた数分前がバカみたいだ。こんなのどう頑張ったところで耐えられるわけがない。

「どうしたんですか？　もう我慢できない？　お漏らししちゃう？　じゃあ、カメさんにぎにぎ体操、終わりにしょっか。先生と一緒に、休憩しようね♡」

ぱっと手が離され、下半身全体を支配していた快楽の供給が停止する。その代わりに、人工的に造られた美女の顔が横から迫ってくる。悪戯っぽくにやりと笑った美貌が、その次の瞬間にはゼロ距離まで近づく。

「んんっ、ちゅっ……、ふふっ。きもちいいね……♡　とん、とん。とん、とん♡　いい子いい子……。おとなしくできてえらいね♡　ちゅっ。ちぅ、ちゅうっ……、ふふっ、えらい、えらい♡」

口づけを交わしながら、背中を一定のリズムで優しく叩かれる。耳を蹂躙していた凶暴

なふわふわの唇が俺の唇を何度も食み、その内側から這い出してきたぬるぬるの舌が、俺の舌を捕食するようにねっとりと絡みついてくる。

唾液を寄越せと言わんばかりに口腔内を這いずり回り、口の端から涎が垂れることすら厭わない。ただひたすらに、しかし暴力的ではなく理知的な静けさで、俺を彼女自身の淫らな色で染めようとする。

「ん……。ずっとおっきできたね、えらいね♡ じゃあ、休憩おしまい」

女性のしなやかな指が再び竿に絡みつく。扱き始めず、ただ竿を優しくマッサージするような穏やかな動きが続く。指先がカリや裏筋をすりすりと撫で上げ、竿を握る強さが機械的に、そして連続的に変化し続ける。

「ねえ、じっとしてないと終わらないよ？　どこが一番気持ちいいのかなって、先生のおてが君のおちんちん触ってるの。おちんちんピクピクさせてると、いつまでたってもどこかな、どこかなって指がこちょこちょし続けちゃうよ。いいの？」

「や、やだ……」

「うん。我慢できるね。先生も君のおちんちんのこと、ちょっと分かってきたかも。……じゃあ、しこしこ再開しょっか。ちょっと早く……しこしこ、しこしこ。はい、ストップ♡ もう一回、しこしこ、しこしこ。しこしこ、しこしこ、ストップ♡」

射精感をいいように弄ばれて、目を白黒させる。腰を浮かせ、陰茎を彼女の手に擦り付けて快感を得ようとするが、彼女はその動きをするりとかわしていく。上手く追いかけても握力すら緩めて、同じ刺激をキープし続ける。彼女の精密な計算の前では俺の企みなど徒労に過ぎない。大人と子供の関係性のように、こちらの幼稚な考えをことごとく見透かしてくる。

「ほーら♡ じっとしてないと、ずっとおちんちんムズムズさせたままだよ。それは嫌でしょ？」

その声に嘲りの色が混じる。俺が射精しようとして腰を動かしているのは百も承知だと言わんばかりに。

「白いおしっこを好きな時に出して良いのは、ちゃんと先生の言うことが聞ける人だけですよ。欲望の赴くまま無様に腰をヘコヘコさせてる、堪え性のない赤ちゃんにはまだ早いでちゅから。あれ、まさかバレてないとでも思ってたんでちゅかぁ？」

「ち、ちがっ。俺はっ……」

「んー？ 先生に何か文句、あるんでちゅかぁ？ 一丁前に意見する前に、まずはその節操なくビンビンに勃たせたおバカなおちんちんをどうにかしてください。臭くてグロい赤黒チンポ、みっともなさすぎて手でコいてあげる気にもなりませんからぁ」

「たかがオナニー用の機械だと侮っていたロボットにバカにされる気分、どうでちゅか？　でもぉ、偽物の女の子の細くて柔らかぁい指先でおちんちんいじいじされて、生温かい吐息を吹きかけられるだけで女の子とエッチしてる錯覚に陥っちゃうおバカさんには、この程度の扱いで十分ですよね？」
「クソ……」
「何か言いまちたかぁ？　赤ちゃんは、ばぶ、ばぶって言うんですよ。はーい♡　ばぶ、ばぶぅ♡　ふふっ」
　預けた背中から俺を小馬鹿にするような声が止まらない。押し黙っている俺が気に入らないのか、彼女は剛直をやんわりと握る手に力を込めた。無遠慮な力加減、それこそ痛みを伴う握力で締め上げられ、背中が勝手に浮き上がる。
「あぐっ」
「先生、君が言葉が分からないくらいのおバカさんじゃないって信じてます。ばぶばぶって言うだけでちゅよ？　言わないと、もうおちんちんマッサージ、してあげませんよー？」
「ば、ばぶっ、ばぶばぶっ！」
「ふふっ、ばーか♡　うんうん、そっかぁ♡　白いおしっこ、先生のおてて使ってびゅーびゅーって出してほしいんだぁ。……しょうがないなぁ。先生が赤ちゃんの雑魚チンポ、す

べすべのおててでシコシコして、一瞬でイカせてあげるね♡」
　添えられた右手がゆっくりと動き出す。しかし今度は確実に絶頂へと至らしめるストロークで、我慢汁でぬるぬるになった指がカリ首を擦り上げる。本当に一瞬でイカされてしまう。ああ、無理だ。もう我慢できない。下半身で渦巻いていた快感が、形になって放出される。
「ちこ、ちこ。ちこ、ちこ。ちこ、ちこ、ちこ、ちこ♡ おしっこ上ってきた？　おしっこ出そう？　うん、そっか♡ じゃあ、だしちゃおっ♡ ぴゅるぴゅるぴゅるっておしっこするところ、先生に見せて？ ほーら♡ ぴゅっぴゅっ、ぴゅーっ♡」
　どぴゅるるるっ！　びゅーっ、びゅっ！　びゅぷっ！　びゅく、びゅくっ。
「みてみて、ほらぁ♡ 白くてドロドロのくっさぁい濃厚ザーメンミルクがたっぷり♡ 先生のお鼻壊れちゃうよぉ」
　自分の手にこびりついた俺の精液をひとしきり眺めると、彼女はそれをゆっくりと口元に運ぶ。俺の顔の真横で現在進行形で行われる、淫らでありながら優美な動き。それを目が勝手に追いかけてしまう。指一本一本に付着した粘性のある液体が、つやつやとした健康的で妖艶な赤い舌で絡め取られ、彼女の口の中へと導かれ、そして嚥下されてゆく。
「んんっ、んくっ、んく、んくっ……♡ んっ。はい、ごちそうさまでした。……あれあれ？

なんでココ、またちょっとムクムクしてるのかなぁ。もしかして、先生のあったかくてぬるぬるのお口の中で、エッロ〜い舌技でチンコキされるの想像しちゃった？」

「う、うん……」

「そっかぁ！　うんうん、素直な子、先生大好き♡　じゃあえらい子には、ご褒美あげちゃうね。おちんちんを先生のお口でぺろぺろ、ちゅうちゅうしてあげまちゅね♡　ベロでおちんぽ、ごしごし、ごしごし……ふふっ、期待して、おちんちんがぴくぴく震えてる♡」

立ち上がった彼女は俺の前に座り、今度は股座に顔を近づける。傷ひとつない綺麗な背中が俺の眼下に見え、まっすぐな背骨の丘陵の横に広がる白い裾野の美しさが目に映る。かっちりと留められたブラのホックを外したい欲求に囚われている俺を横目に、彼女は柔らかな唇を精液まみれの亀頭に近づけ、柔らかな鼻息を吹きかける。髪をかきあげ、焦らすように空を切るキスを一回。

「ちゅっ♡　んふふ……、おちんちん、先生のふわふわの唇で、ちゅーちゅーしてほちいでちゅかぁ？」

その問いかけにガクガクと首を縦に振ると、彼女は心底軽蔑したように鼻で笑って、亀頭に軽く口付けした。ねっとりと舌で精液をこそげ取り、ちゅうちゅう、つぱつぱと唇だけで亀頭を舐る。軽く咥えたまま鈴口を舌先でつつき、割れ目の周辺をくるくると撫で回す。

「んぅ……、ちぅ、ちぅ。ちゅっ、ちゅぷっ。ちゅっ、ちゅうっ♡　ふふっ、透明なお汁が出てきちゃったかな？」

唇だけを押し付けるソフトなキスや、啄むような鋭い刺激を先端やカリ首に加えながら、竿にも付着した精液を嫌がる顔一つせずに舐めとっていく。キスの吸い付く音すら艶かしい。萎えかけていたペニスはすぐに硬度を取り戻す。

「んふふっ、こーら。今度は先生のお顔にちんちん擦りつけちゃうの？　先生のふわふわの唇に透明なカウパーのリップ、塗りたくりたいの？　……だぁーめ。さっき、勝手に腰へコヘコ動かして、先生のおててに汚ったないチンポ擦り付けて、自分だけ気持ちよくなろうとしたでしょ？」

いよいよ彼女の口から言及がなされる。追求を逃れることはできないと知っているから、俺は何も言わない。言えないのだ。

「最初に言ったよね？　勝手なことしたら、追加で射精って。先生におててで気持ちよくしてもらっているのに、その恩を仇で返すような悪い子には、ちゃんとお仕置きしてあげないといけません♡　この程度の命令すら守れないんですから。ほら、自分の犯した罪に向き合ってください。それともさらにもう一回、追加で先生のお口おまんこに白いザーメン、びゅるびゅるしたいでちゅか？」

冷たい機械仕掛けの瞳が詰問する。射精したいんだろと俺に問いかける。それに体が勝手に反応して、ペニスがヒクッと震えてしまう。

「ぷふっ、なんですか？　それ。おちんちんでお返事してるつもりですかぁ？　ふふっ、あはは っ♡　本当に哀れですね」

口元を歪ませた表情から一転、慈愛に満ちた表情へ。俺は期待していた。そしてその期待はあっけなく打ち砕かれる。

「いいですよ。……なんて、言うわけないじゃないですか。射精は一回だけです。そしたらおちんちんの先っぽをねちっこくかぷかぷぺろぺろ、ちゅうちゅうして、潮吹きさせてあげます。ふふっ、嬉しい？　嬉しすぎて割れ目さんからおちんぽシロップ溢れてきちゃったんだぁ♡」

俺には目もくれず、ペニスに向けて話しかける。時折柔らかな唇でキスを繰り返しながら見つめられると、恥ずかしさにも似た快感で肉棒はすっかり出来上がってしまう。

「うんうん。そうだね。じゃあ行くよ……？　あむっ♡」

唇で先端のみをぱくりと咥え込む。ぬるりとした舌がモーターのような僅かな駆動音とともに伸び、竿の真下にぴたりと張り付くと、高速でそれが旋回しだす。人間の口腔内と異なる構造だからこそできる攻め。

「く、うっ、うあああっ！」

ゆっくりと彼女は顔を前後に動かし始める。ぎゅるぎゅるとした回転運動と合わさり、ペニス全体を捻りあげるような暴力的な刺激になる。まるで機械式のオナホール。竿から一ミリたりとも離れずに、唾液のローションを潤滑剤として舌がぐるぐると駆け回り、軽いバキュームも加わってペニスが口の中で揉みくちゃにされる。

当の本人は俺を冷ややかな眼差しで見つめ、俺の表情をつぶさに観察し続けている。喉奥に肉棒を突っ込んでも苦しい顔一つせず、搾精機械として淡々と「精を搾り取る」目的に向けて稼働し続ける。淫靡な女性の肉体が目の端に映る。その下着に隠された生の乳房も、女性器すらも使われていないのに、俺はもう二度目の射精を迎えてしまう。

びゅるるるっ、びゅくびゅくびゅくっ！　びゅぷっ！

口の中に吐精しても、なおも攻めは継続される。今度は喉奥に肉竿を押し込んだまま、人間には存在しないであろう謎のリング状の器官がにゅうっと伸び、亀頭にぺたりと張り付き、何度も甘噛みを繰り返すようにくぽくぽと吸い付いてくる。

陰茎が先端から溶けてなくなってしまうのではないかと思うほどの快感。それと共に舌先が竿をこしゅこしゅと刷毛のように肉竿を擦り上げ、漏れ出た精液を全て回収しようとする。竿全体の感覚が薄れ、脚がガクガクと震える。

にゅくにゅくにゅく、くぷくぷくぷくぷ……♡

「やっ！　あっ、ああっ！　もう、むりっ、ああああああああああっ！」

ぷしゅううっ！

射精直後のペニスの先端を刺激され続け、人生で初めての潮吹きをあっけなく体験してしまう。あまりに突然のことで驚いてしまった。尿道を駆け上がる液体の感覚は、尿でも精液でもない別物だとはっきり感じ取れたが、言葉にするのであれば「失禁」が一番近い。しかし我慢する、しないの問題ではない。気づいたら出ていた、というのが正しいだろう。

ともかく、この僅か一分の間に思い切り体力と精気を吸われ、俺は座っているにも関わらず息切れを起こしていた。やめてほしい気持ちとそのまま快楽に身を任せていたい気持ちがせめぎ合い、気づいたら目から涙が溢れていた。

「っはぁっ、あぁっ……。はぁっ、はぁっ……」

「あらあら、泣いてるの？　ごめんね、いじわる、しすぎちゃったね……♡　先生も、いじわるしちゃってごめんね♡　今度はゆっくり、じっくり大きくする？」

ちゅぽっ、と音を立ててペニスが彼女の口から解放される。目尻の涙を指で拭いながら、薄く微笑んだ彼女は先ほどと同じ猫撫で声でそう尋ねた。

「じっくりは、やだ……、普通がいい……。でも、もう、勃たない……」

「そんなことないよー？　先生ね、君が元気になる方法、知ってるんだから」
　背中に手を回す。ぷちっと小さな音を立てて、胸の覆いが外される。球体を二つに割ったような美しい乳房は、手からこぼれ落ちそうな大きさに加えて重力に負けないハリを備えており、桜色の突起がその丘の上でぴんと立ち上がっている。
「ほら、見て？　先生のおっぱいだよ？　どうかな？」
「き、綺麗……」
「触ってみる？」
「は、はいっ……」
　俺は双丘に手を伸ばす。雪のように白い柔肌にふにょんと指が沈み込む。豊かな乳房を手の平全体で包む。男を魅了するためだけにデザインされた人造の肉の塊を撫でるようにやんわりと揉む。手のひらがぴりぴりと焼けつくような快感に病みつきになってしまう。ああ、柔らかい。もっと触れていたい。
「ふふっ。触り方、本当にいやらしいね♡　赤ちゃんのくせに女の子が気持ちよくなれる触り方してる点はちょっとムカつくけど、しょうがないからプラス評価してあげます♡　そしたらお返しに、先生がおちんちん、にぎにぎ、ちこちこしてあげるから♡　んふふっ、ちゅっ♡　しこしこ、しこしこ。ちょっとずつ、ね」

「もっと？　もっと欲しい？　でもだーめ♡　よわよわおちんちんだから、ゆっくりちゅこちゅこしないと、ね。しーこ、しーこ。はい、ストップ。んふふっ、ぴくぴくしてる♡　もっと気持ちいい、気持ちいいになりたくて、腰へコへコさせちゃって。かわいい♡」

「ちこちこ、ちこちこ。んんっ……ちゅ。あったかくてぬるぬるのお口の中で気持ちよくなりながら、先生のざらざらのベロで、ごしごし、ごしごしって、おちんぽ磨きしてほちいでちゅかぁ？」

ざらざらのベロでごしごし。その言葉の響きが、俺の脳に直接訴えかける。刺激がもっと欲しい。考えるよりも先に、本能的に俺の首が縦に振られる。

「じゃあ先生、おちんちんぱくぱくってしちゃいますね。いただきます♡　んぁ……むっ」

ぐぽぁと大きく開いた口が一気にペニスを咥え込み、竿全体が囚われの身になる。唾液が舌からじわりと溢れて、口腔内に十分な潤いをもたらした。じゅる、じゅると、口の中から下品な音が響く。ぐっぷりと咥え込んだ口の内側では舌だけが動き、ズリ、ズリと竿を擦りながら頬肉と合わせてマッサージのような柔らかい刺激を与える。にゅむにゅむと口の中全体が吸い付く穏やかな刺激が、竿を優しく包み込む。

「ちゅぱっ。んふふっ、ほら、もうこんなに固くなった。先生のお口でおちんちんもぐもぐされるの、気持ちいいね。じゃあ先生のお口に、とろとろの白いおしっこ、ぴゅるるって

出しましょうね♡」

今度は先ほどと違い、竿全体にウェーブをかけるように舌が這いずり回る。吸引力を増しながら、口全体を器用に使ってペニスに微振動を加え、まったりとした刺激で射精感を高める。先ほどの絶頂からまだ十分な時間が経っていない男性器は普段よりも感覚が鋭敏になっている。そのため、弱い刺激でも十分に射精へと至らしめることが可能だ。

くぷくぷと卑猥な音を立てながら、顔を何度も小刻みに前後に往復させる。彼女の口の中は間違いなく、最高性能の全自動オナホールだ。

びゅるるっ！　びゅくっ、びゅくっ。

「んんっ、んく、んくっ。じゅるるっ。……んふっ♡　ごちそうさまでした♡」

三回目で少し勢いの落ちた射精が起こる。しかし薬の影響で依然として液量は普段よりも十分多い。口の端に溢れた精液を指先で絡め取り、ちゅぱっと水音を立ててそれをしゃぶって見せつける。それを乳房に持って行き、柔らかな白い丘で液体をあざとく拭い取る。流れるような艶のある動きは、俺の視線を的確に誘導する。

「じゃあ、今日のメニューの最後に……、『中出し』しよっか」

「も、もう、無理……」

「無理じゃないですよ？　まだ三回しか射精してないんですから、金玉に精液、残ってるは

ずですよ。先生に口答え、するんですか？」
「……い、いえ……」
「ふふっ。なんでそんなに情けない顔してるんですか？　こんな可愛い女の子がおまんこの穴を貸してあげるって言ってるんですから、もっと感謝して大喜びするべきですよ？　人型自慰行為補助機械の、人間のメスなんて比較にならないくらい気持ちいい膣内に、びゅるびゅるって好きなだけ精子無駄打ちして、そのザコい精液から人間の子供が絶対にできないようにしないとね♡　はい、お返事は？」
「っ……、はい」
「声が小さいでちゅよー？　小さいのはおちんちんだけにしてもらえますか？」
「はいっ！」
「ふふっ、素っ裸で大声出してバカみたい。はい、よくできまちたね。さて……」
　するすると下着を脱ぐ。滑らかな太腿、そしてすらりとしたふくらはぎを滑り落ちた光沢のある布地が布団の上に着地すると、隠されていた最後の場所が目前にさらけ出された。ヘソの直下。鼠蹊部を下り、産毛すら生えていないツルツルの恥丘のその向こう。ぴっちりと閉じた一筋の割れ目。
「人間のオスってみ～んな、私の裸見ると条件反射みたいに鼻息荒くして、おちんちんバッ

キバキに勃たせちゃうんですよね。ふふっ♡ さあ、寝転がってください。おちんちんおねだりして、とろとろのお汁垂れ流しちゃってるおまんこっぽいシリコンの穴の中に、さっさとそのなけなしの汚いオス汁コキ捨てちゃってくださいね」

「うっわぁ……。股間そんなに見つめて。視線だけで種付けされちゃいそうです。そんなに見たいですか？　先生のおまんこ穴。ほら、ここ。見えますか？　くぱぁって広げてあげますよ……」

M字に開かれたむっちりとした太腿の間に顔を入れ、彼女自身が指で開いた秘裂を凝視する。ひくひくと蠢くサーモンピンクの膣口の上には、張り詰めて見るからに硬度を増した陰核が確かに存在していた。肉付きの薄そうな彼女の体は、しかし下半身、特に下腹部周りに限って言えば、触り心地の良さそうなもちもちとした肉がしっかりと付いている。もっとも、その肉も人工的に造られたシリコンであることに違いないのだが。

突然、ぷしゅっと音がして、彼女の股間から吹き出した液体が顔面に飛び散る。

「あら、うふふっ。ごめんなさい。おまんこ汁が漏れちゃいました」

脳が揺さぶられるような、しかしクセになる甘い香りのする液体を手で拭う俺を見て、彼女はわざとらしく言ってみせる。屈辱的な気分になると同時に、独特の淫臭のせいで興奮が湧き上がるのが止められない。不随意的に股間に血が集まり、びくん、びくんと少しず

つ上下しながらペニスが硬度をどんどん増していく。
「おちんちんおっきしちゃったんだ♡ 先生の濃ゆ〜いメス汁ぶっかけられて、興奮しちゃった？　おまんこ、きゅっ、きゅっ、ぎゅ〜……って締め付けて、おちんちんハグしてあげよっか？　ふふふっ♡ あぁん、かわいいお顔♡」
「あったかくて、おちんちんをぐにゅぐにゅぐにゅ〜って包み込んでくれるおまんこ穴に、白いお精子びゅう、びゅうって、上手におしっこしましょうね♡」
　仰向けになった俺に跨って膣口にペニスの先端をあてがい、ぬりゅぬりゅと軽くこすり合せる。見た目に反して柔らかな割れ目がこじ開けられてめくれ上がり、ぬぷぷっと先端だけが入ると、そのまま一気に腰が下りてくる。竿全体を密集したイボのような構造物がゾリゾリと擦り上げ、咥え込んだ肉棒の形に合わせてふくふくと内側から膨張し、ぴったりのサイズにきゅっと締め付けてくる。
「かはっ……！」
「んっ……、はぁっ。入ったね。赤ちゃんちんちんが先生のおまんこでぱっくんされちゃった♡ 嬉しいね♡ お顔、とろけちゃってる♡」

彼女はそのまま、ゆっくりと腰を前後に揺らし始めた。ペニスが温かくぬるぬるした空間の中で弄ばれ、まったりとした快感で下半身が満たされる多幸感に包まれる。しかしみちみちとした肉壁は四方八方からぎゅうぎゅうと食らいつき、少しでも気を抜けば一気に上り詰めた射精欲求が形となって現れてしまいそうだ。そのせめぎあいの中、俺はなんとか腹に力を込めてこの幸福感をできるだけ持続させようと抗っていた。

「ねえ、先生、君とお別れしたくないなぁ」

「えっ……」

にゅち、にゅちといやらしい水音を立てて膣を締め上げながら、彼女はそんな風に呟いた。

「ここに勤めませんか？　私と毎日エッチするだけの簡単なお仕事。衣食住全部こっちで持ってあげるし、君はただ射精するだけでいいの。毎日オナニーするだけでお金が入るって素敵じゃないですか？」

すりすり。さわさわさわ。

俺の思考をかき乱すように、女性の細い指が俺の乳首の周りを這い回る。彼女はよがる様子もなく、平気な顔をして肉竿をその体内に収めながら、快感に喘ぐ男の胸の突起を人差し指で弾き、二本の指で摘み、そして天にも昇る指使いでくにゅくにゅと扱きあげる。

「ねぇ、いいでしょ？　これまでずっと頑張ってきたおちんちん、先生が毎日労ってあげる。君が望むならあまあまなプレイも、おちんちんをいじめるプレイもしてあげる。一緒に添い寝して、君が寝付くまでずっと抱っこして、お耳ぺろぺろもしてあげますよ」

彼女は微動だにしていないにも関わらず蜜壺が勝手に動き出し、きゅうきゅうと収縮を繰り返す。さらに擬似的なピストン運動が起こり、じっとこちらを見つめる彼女の下で隠れて誘惑するようにぐちゅぐちゅ、ぐぽぐぽとペニスをねちっこく虐め抜く。肉筒全体に張り巡らされたヒダが小さな舌のように、ぞりぞりと肉竿を舐め回す。

「なんで……」

「君が研究に役立つからだよ？　君が積極的に私を使ってくれれば、それだけデータが蓄積されるから。ね？　いいでしょ？　君も得するし、当然私たちも得する。いいことばっかりだよ？」

「あ、ああ……」

「ふふっ。いい子だね。じゃあ、『ストレリチアさんと毎日セックスしたいです』って、大きな声で言ってみて？　先生のことが大好きな君の気持ちを、私に伝えてほしいなぁ」

オナニーしている時が一番幸せ。それは間違いないことだ。正直今の仕事も疲れてきたし、ここらで転職するのも悪くないんじゃないのか。リフレッシュを仕事にできるなんて、

割といいことなんじゃないのか。なんなら彼女を使ってのオナニーは人間のセックスより気持ちがいいし、彼女の言う通り良いことずくめでしかない。いちいちバカにされるのは気にくわないが、まあこれもロールプレイの一環として許してやろうではないか。明日には別の性格に変わっていたりするかもしれないし。

「す、ストレリチアさんとっ、毎日セックスしたいです！」

「そっかぁ……。うん、ちゃんと録音しました。君は今日から私の奴隷ですね♡」

「は……？」

奴隷？　彼女の口から放たれた一言に全身が硬直する。そういうプレイだと思っていたが、これもその延長だろうか？　流石にそう信じたいと思っていたが、彼女は口の端を吊り上げてこう言ってのけた。

「最初に言ったでしょ？　君は実験動物だって。私に死ぬまで使い倒されるの。金玉カラカラになるまで絞り尽くして、その精液全部を私に捧げるの。はい、お話はこれでおしまい。早く最後のお射精して、先生にさようならの挨拶をしましょうね？」

くびれのある腰が上下に動きだす。ゆったりとしたストロークが次第にその速度を増し、柔らかな尻が俺の腰にぱちゅん、ぱちゅんと打ち付ける音の間隔が次第に短くなる。射精に向かわせるには単調な刺激が最も好ましい。それをこの機械はよく理解しているようだっ

た。
「おいっ、だ、騙しっ、んんっ」
　恨み言を述べようとする口を、彼女の手が塞ぐ。万力のような力で押さえつけられ、唇がわずかに動くことすら許さない。
「騙してないですよー？　毎日セックスできるのは本当のことだし、毎日一緒に寝てあげるのも本当です。それを望んだのは君自身でしょ？　自分の発言にもっと責任を持ちましょうね。……あ、もう遅いか」
「んんっ、んふっ！　んんーっ！」
「はいはい。奴隷は黙って私のナカに精液おもらししなさい。もうちんちんのビクビク止まんないね♡　ちょっと痛くした方が、すぐに射精来ちゃうのかな？　明日以降に対照実験しないとだね♡　はい、ぱんぱん、ぱんぱん♡　精子おもらしきちゃう？　いいよ、出して♡　出して♡」
　とろとろの人工愛液で潤った膣壁が、天にも昇るような気持ち良さで優しくペニスを包み込む。その肉感溢れる膣肉が、痛いほどに勃起した肉竿を余すところなく舐り回す。ずりゅ、ずりゅ。一擦りごとに射精が近くなる。睾丸から上ったなけなしの精液が、逃げ場を求めて尿道口に押し寄せる。

びゅううううっ！　びゅぷっ！　びゅくっ、びゅくっ！　びゅっ、びゅううっ。
「うふふっ、たくさん出てる♡　サラサラの液体になっちゃったザコ精液が、先生のお腹にとぷとぷって注がれてるの分かるよ♡」
精液を一滴残らず回収しようと、膣壁がぐにゅりぐにゅりと下から上へ波打つように動く。しばらくそれを続け、十分に搾り取ったと判断した彼女は、何の感慨もなくぐぷりとペニスを抜いた。力なく腹に倒れ込んだ陰茎は、透明な愛液でコーティングされてつやつやになっていた。
口を押さえつけていた手が離れ、呼吸の通り道が解放される。鼻から吸い込む空気がやけに冷たい。彼女はゆっくりと立ち上がって、肩で息をしながらへたり込む全裸の俺を見下ろすと、出会った時に見せた天使のような微笑みを俺に向けた。いつもそうやって、母性溢れる微笑みを浮かべてくれればいいのに。俺はあと何回、彼女のこの笑顔を見ることができるのだろうか。
「じゃあ、先生は先に帰りますね。あとで担当者が来るから、それまで君はそこに寝転がってるだけでいいですよ。それじゃ、帰りの挨拶しましょうか。はい、『先生さようなら』って言ってみて？」
「はぁっ、くっ……、せんせい、っ、さようなら」

「うん！　さようなら。また明日ね」
　彼女はそう言って手を振り、一糸纏わぬ姿でその美しいプロポーションを見せつけるかのようにして部屋を出て行った。彼女の左右に艶めかしく揺れる尻をただ眺めることしかできず、俺はゆっくりと布団に倒れこむ。今の仕事はどうなるんだろう。家を引き払わないといけないのかな。急に現実に引き戻される思考は、疲労による眠気のせいでぷつりと途切れた。